

臨床実習生の SNS 投稿から見る臨床実習指導者の在り方

新カリキュラムの施行に伴い改訂された臨床工学技士養成所ガイドラインによると、実習指導者は、「各指導内容に対する専門的な知識に優れ、医師又は臨床工学技士として 5 年以上の実務経験及び業績を有し、十分な指導能力を有する者であること」とされている。しかしながら、ガイドラインの定義のみでは、臨床業務を行いながらの実習指導について具体的なイメージの想定は難しいと考えられる。そこで医療系学生が臨床実習中に感じている本音を、臨床実習期間中の SNS 投稿から分析した結果を、より良い実習生と実習指導者の在り方について考える上で必要な情報の一つとして提示する。

1) 臨床実習生の想い

臨床実習後に実習生に実施した振り返りのアンケートでは、以下の肯定的なフレーズが並び、実習指導者や養成校の教員を安堵させる。

「役に立ちました」

「将来に進む方向性を定めることが出来ました」

「優しく指導してもらいありがたかった」

多くの実習施設で熱意ある実習が行われている証拠であり、実習生の成長と学びに多くの貢献をしていると推測される。それは決して虚偽でもなく実習を終えた学生は本当にそのように感じていると思われる。しかしながら、実習中において非常に大きな精神的負荷がかかるのも事実である。海外の研究でも、実習生が臨床実習に対して多くのストレスを感じていることが報告されている。

2) 「医学系学生の臨床実習に関する感情分析」から推測する学生の精神的負荷

「臨床実習生の想い」を得る方法として SNS での大規模調査を行った。分析方法は、SNS の Twitter (調査当時：現 X) の大規模調査として、医学系 (医療従事者) 学生のアカウントから臨床実習に関連する語句を含む投稿を 10 万件収集し分析を行った。以下に示す結果をもとに実習生にかかる精神的負荷について考えてみたい。

(1) 確認された実習中における負の感情

分析結果のうち、特に多く見られるものや、全体の意見を代弁していると思われるものをピックアップした。

- ・実習指導があまりに厳しい
- ・評価がずさん、不明確
- ・良いところを一つも言われない
- ・何か質問しても流されたように感じた
- ・臨床実習指導者による嫌がらせや高圧的な指導

これらの結果から、負の感情には実習指導者に対する不満・愚痴が多いことが分かった。

(2) 時間帯毎の学生の感情変動分析

投稿されたテキストから『楽』、『嫌』、『辛』の含まれるものを時間帯毎に集計した(図1)。

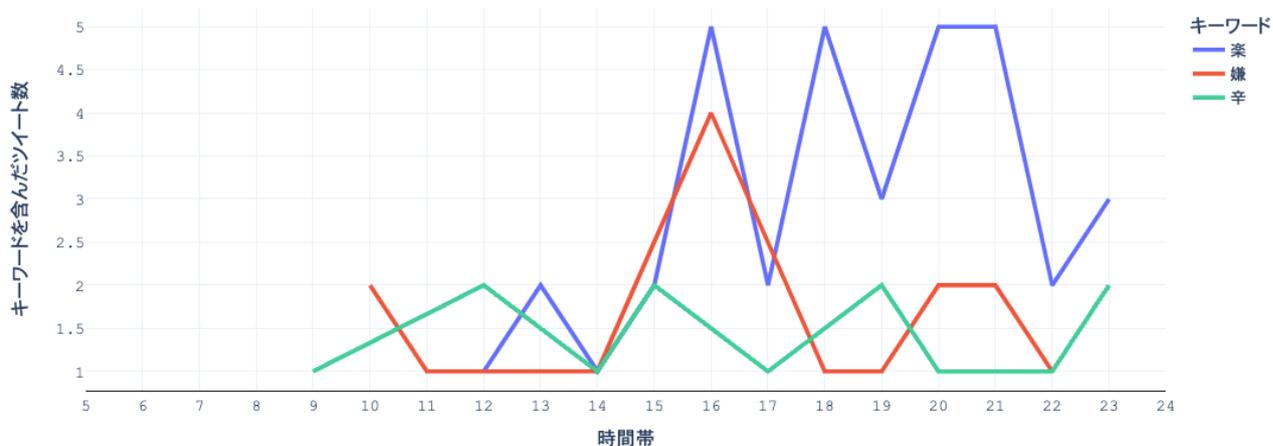


図1 『楽』、『嫌』、『辛』の含まれる投稿の時間帯

負の感情を表す『嫌』(赤線)については16時でピークとなった。臨床実習が終了する平均的な時間と思われる16時に、朝からの疲労の蓄積や次日の実習への不安が露呈している可能性が考えられた。

(3) 感情のポジティブ/ネガティブの全体的な分布

投稿されたテキストから感情を示すものをAIにより抽出し集計を行った。感情として「喜び・怒り・昂り・哀れ・好き・怖れ・安らぎ・嫌・驚き・恥らい」の10種類を分類した(図2)。嫌、哀れ、の感情が1位、3位であり、一定数以上の学生が、負の感情を強く抱いていることが推察できる。

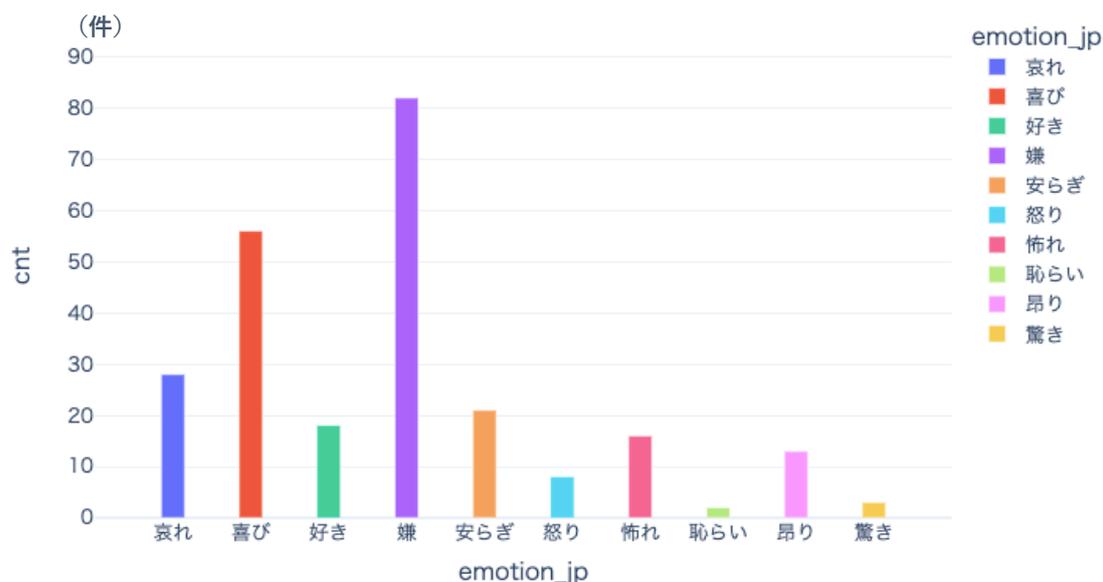


図2 感情のポジティブ/ネガティブの全体的な分布

るのは事実だと思われる。その原因の一つとして実習指導者との関係性が多くを占めている可能性が示唆された。

一方で、臨床実習後に実習生に実施した振り返りのアンケートにあるような肯定的な感情も虚偽にあらず、臨床実習指導者や施設に対する感謝を感じつつも、慣れない環境や人間関係、自身の力不足など様々なストレスがこのようなねじれ現象の要因となっているものと推測される。

臨床実習指導者においては、「実習生が抱える精神的負荷について認識すること」も、指導者の在り方を考える際の重要な要素として捉えてほしい。